患者を支える人々

皮膚・排泄ケア認定看護師 祖父江（そぶえ） 正代（まさよ）さん

1 ストーマ保有者の日常生活サポート
2 食事や入浴・服装・趣味も一緒に考える

97年、WOC看護（現皮膚・排泄ケア）認定看護師資格を取得。07年に名古屋大学大学院医学系研究科（看護学専攻）博士前期課程修了。同年から現職。08年にがん看護専門看護師資格取得。共著「がん患者の褥瘡（じょくそう）ケア」（日本看護協会出版会）がある。

愛知県江南市のJA愛知厚生連江南厚生病院には、皮膚・排泄ケア認定看護師が3人いる。

ケアやサポートの対象は次のような人たちだ。大腸（肛門を含む）、膀胱、子宮などにがんができてストーマ（人工肛門・人工膀胱）を造った人▽がんによって皮膚症状がある人▽入院中や退院後に床ずれや皮膚のかぶれ、むくみなどができた人▽糖尿病の合併症で足の皮膚に症状がある人。

祖父江正代さん(39)は皮膚・排泄ケア認定看護師の一人。ストーマの場合でいえば、手術前後の説明から、造設位置の相談と決定、定期的なサポートと皮膚のトラブルなどのケア、日常生活の悩みや不安の支援、社会福祉に関する情報提供などを担当する。

ストーマ保有者でも生活上の制限はない。祖父江さんは、これまでの生活をできるだけ続けられるように、「漏れない。におわない」「皮膚がかぶれない」「ケアしやすい」ための知識や技術を患者に教える。排泄だけでなく、食事や入浴にはじまり、服装や趣味、性生活に至るまで一緒に考える。紹介状があれば、通院者でなくても相談にのる。

岐阜市に住む男性(47)は直腸がんで3度の手術をし、ストーマを造って5年。「最初は不安ばかりだった。外来で祖父江さんと話をするたびに情報や励ましの言葉をもらい、生きていく安心感を得た。専門知識を持つ看護師がいない病院に通う友人は外出もできず、人にも会えない状態だ」と言う。

祖父江さんはキャリア12年目。ストーマを見れば「いつもどのように自分でケアしているか」「皮膚トラブルがあると患者に何が起こっているか」わかるようになった。

床ずれも、患者が「いつもどんな姿勢で寝ているか」「どの方向に体を動かすか」「どのようなケアを受けているか」などが想像できるという。「床ずれの治療は薬より看護や介護の力が大きい」と言う。

認定看護師の資格取得のきっかけは、専門知識を持つ先輩に相談すると解決できることを知ったから。猛勉強した。外来でストーマ保有者の人から、「海外旅行に行ってきた」「ゴルフしたけど大丈夫だった」と言われる。「そんなときに一緒に喜べるのが一番うれしいです」という。

（医療ジャーナリスト・福原麻希）

（アスパラクラブのホームページに福原さんのコラムを掲載しています）